

第17章 智恵の完成（般若波羅蜜） 252頁17行目~254頁最後まで

第11章から六波羅蜜について学んできました

- 第11章 六波羅蜜の設定
- 第12章 施しの波羅蜜（布施波羅蜜）
- 第13章 戒の波羅蜜（戒波羅蜜）
- 第14章 忍の波羅蜜（忍辱波羅蜜）
- 第15章 精進の波羅蜜（精進波羅蜜）
- 第16章 静慮の波羅蜜（禅定波羅蜜）
- 第17章 智恵の完成（般若波羅蜜） ←今ここ

第17章の内容は…

■般若波羅蜜（智恵の完成）について、以下七つの義により智恵の波羅蜜は包摂されている（P233）

1. 過失・功德の二種類を思惟すること P233 235
2. 〔自〕体 P235
3. 区別 P235
4. 区別個々の自相（定義） P235 236
5. 知るべきこと P236 246

6. 数習すべきこと

数習の必要性

数習そのもの【繰り返し数習する1)~4)の4つ】

- 1) 前行
- 2) 等至（三昧）

3) 後得

＜前々回、文子さんが分けてくださった「後得」の内容＞

- a) 後得においてはどのようにあるべきか
- b) 勝義・空性・般若波羅蜜を瞑想すると、福德が大きいこと
- c) 空性の義がなければ解脱を得ないこと

d) 空性の義があれば全てが含まれること

4) 数習したことの証因（きざし）

} 本日の範囲

7. 果

前回は上記 d) 空性の義があれば全てが含まれること の「懺悔」まで進みました。

本日は、3)d)のそれ以降と、4)数習したことの証因^{きざし} そして智恵の果^{ほんにや}についてまでです。

*用語はすべて、石田瑞麿著『仏教語大辞典』より引用しました。

*青字は岩村が追加した文字や意見です。

また、この義こそにおいて、**戒・誓言（三昧耶）を護る**こともまた完全です。『天子所問経』に、「そこに〔制御する〕**律儀、非律儀の慢心**が無いところのものが、涅槃の戒です。清浄な戒です。」と説かれています。『〔地蔵〕十輪経』にもまた、「家に住して、髪と髭をも剃っていない、法衣も着ていない、戒もまた受けていないけれども、聖者の**法性**を具えている——これこそを、勝義（真実）の比丘というのです。」と説かれています。

この義：空性の義

戒：【かい】悪を止め、善を修する、行いを慎むための戒めをいう。その戒めとしてあやまちを防止するための規則が説かれ、その規則を守ると誓うことによって仏教徒の一員になるものとする。

誓言：【せいごん】まごころのこもった言葉。または、誓いの言葉。

律儀：【りつぎ】悪行または過失に陥ることを未然にふせぐはたらきのあるもの。善行のこと。

非律儀：→非律儀非不律儀【ひりつぎ - ひふりつぎ】具舍宗で説く無表業の三種のなかの一つ。律儀・不律儀以外の時に応じて善悪の行為によって起こるもの。
→不律儀【ふ - りつぎ】悪をおこし、善をさまたげる心がまえ。

慢心：【まんしん】おごりたかぶる心。思いあがる心。

法性：【ほっしょう】一切の存在、現象の真の本性。すべてのものの真実のありのままのすがた。

→空性を完全に理解できれば、戒や誓願を守ることについても完全なものになる。そのたとえとして、出家した僧ではなく見た目が普通の人でも、空性を理解して聖者の法性を具えている人が本当の意味での「比丘」であるという例により説明している、というところでしょうか。

本文 252頁24行目～30行目

また、この義こそにおいて、**聞と思と修との三つもまた完全です。**

- ①『無住タントラ』に、「非作為の本物の食べ物を食べたなら、あらゆる学説すべてもまた満足することになる。幼稚な者は**正得**しない。言説、言葉に依っている。すべては自己の心の**相**である」と説かれています。
- ②サラハパもまた〔『ドーハー蔵の歌』に〕「**読誦**はそれです。**受持**と**修習**はそれです。論書を心髄に保持することも、それです。それについて、表示する見が有るわけではない。」と説かれています。

この義：空性の義

正得：→得：【とく】とくに証果（悟り）を得ること。空を悟ること。

相：【そう】内的な本質に対する外的なすがた。外見の形、ありさま。外に現れた状態。

読誦：【どくじゅ】声を出して経文を読むこと。

受持：【じゅじ】教えを受けしっかり覚えておくこと。

修習：【しゅじゅう】繰り返し修めること。身につくまで修行に務めること。

→空性を完全に理解できれば、聞・思・修（三慧=修行）についても完全なものになる。そのたとえとして、『無住タントラ』『ドーハー蔵の歌』2つの経典を示して説明しているということでしょうか…。

→『無住タントラ』は、口先だけで言ってわかっているつもりでは悟れない、的な内容、『ドーハー蔵の歌』は、「表示する見が有るわけではない」で見た目じゃわからないけど、的なことでしょうか？「表示する見」がよくわからない…。

本文 252頁31行目～34行目

また、**この義こそが供物の法行**でもあるのです。『秘蜜甘露王タントラ』に、「供養と供物など作業と為すべきことの種々のすべては、心の真実を得たことにより、すべてはこれにより包摂されると決定する。」と説かれています。

この義：空性の義

法行：【ほうぎょう】法に則った行い。真実の理にそった修行。

→空性の理解があれば、全ての供物（布施？）が含まれること、でしょうか。いまひとつ良くわかりません。

では、〔自〕体または心こそをただ一つ修習するにあたって、**それらすべてが収まっている**なら、**方便の次第**を多く説かれたものが出ているのは、どのようにであるか、というと、

〔**方便の分が堅固**でなく、ものごとの〕**住**し方〔・実相〕について愚かな**福分**の劣った者たちを、導くためです。

- ①『〔入一切諸仏境界〕智光明莊嚴經』に、「**因縁**に関係すると説明されることと、**次第**に**悟入**すると説かれていることもまた、愚かな者たちに**方便**として説かれた。**自然**成就したこの法において、**次第**に**修治**するどんなことが有るでしょうか。」と説かれています。
- ②『チャクラサムヴァラ』にもまた、「このように我は虚空と等しいように、常に解脱した本性を得る。」と説かれています。
- ③『虚空宝経』にもまた、「法界の海に入っていない間は、地と道は別異であるが、法界の海に至ってから、地と道は少しも歩みえない。」と説かれています。主尊（アティシヤ）もまた『行修灯論』に、「ひとえに**等至**して心が**堅固**であるなら、〔それを離れた〕身語の善に勤めるべきではない。」と説かれています。

それらすべてが収まっている：空性の義があれば全てが含まれること

方便：【ほうべん】真実の教えに導くためのてだてとして、仮に用いる手段としての教え。世の人を救い、悟りに導くために一時、手段として用いる方法。

次第：【しだい】順序。

堅固：【けんご】現世の幸せをうけるもととなるもの。運のよい生まれつき。

住：【じゅう】四相（生・住・異・滅）の一つ。存在するものが現在の位においてその状態を保っていること。現在の状態に住していること。

福分：【ふくぶん】現世の幸せをうけるもととなるもの。運のよい生まれつき。

因縁：【いんねん】結果を引き起こす直接の内的原因である因と、それを外から助ける間接的原因である縁。原因。理由。わけ。

悟入：【ごにゅう】悟道に入ること。一切のものの真実の姿を悟ること。
→悟道：悟ること。

自然：【じねん】すこしも人為の加わらないこと。天然のままであること。おのずからにして得ている智慧。

修治：【 】

等至：【とうじ】身心の平等に至った状態。

→空性を完全に理解することが全てを包摂するなら、方便を説いたものが出ているのは何でかという、それは私（イワムラ）のように良く分かっていない衆生を導くためのもので、①、②、③、の引用をもって説明している、というところでしょうか。①の**次第に悟入**、**次第に修治**や③の「法界の海に入っていない間は、地と道は別異であるが、法界の海に至ってから、地と道は

少しも歩みえない。」が何やら良くわからず、ピンと来ないのですが…。

本文 253頁17行目～23行目

数習したことの証因

〔第四：繰り返し〕数習したことの証^{きざし}因は、

- ①善に不放逸になる、
- ②煩惱の分が小さくなる、
- ③有情に対する悲が生ずることになる、
- ④修行に〔鄭重に〕勉励することになる、
- ⑤散動すべてを捨てることになる、
- ⑥今生に対して執着しなくて、こだわりが無くなるのです。

そのようにまた、『宝鬘』に、空性を数習することにより、諸々の善への不放逸を得る。」などと説かれています。

証因 : 【きざし】？。→証 : 【しょう】正法を修得して真実の理を体得すること。証拠。真実によるあかし。証明。

善 : 【ぜん】正しい道理に従い、道德にかなうこと。よいこと。またそのような行為。

不放逸 : 【ふほういつ】修行などをなまけないこと。勝手気ままな心に流されないこと。

分 : 【ぶん】全体のなかの部分。一部分。

散 : 【さん】心が乱れて定まらないこと。散心。

→証因（きざし）としての語が引けなかったのですが、「数習した結果こうなるよ」といったことのように思えますが…。どうでしょう。

智恵の果

智恵の果は

1) 究竟と

2) 当座の二つと知るべきです、

そのうち、

①〔第一：〕究竟は、無上の正覚を得るのです。そのようにまた、『七百頌〔般若波羅蜜〕經』に、「マンジュシュリーよ、智恵の完成（般若波羅蜜）を行ずるなら、菩薩大士は速やかに無上の正等覚に現等覚することになる。」と説かれています。

②〔第二：〕当座には、樂・善すべてが生起するのです。すなわち『聖摂』に、「仏子と声聞・独覚・諸天と〔世の〕衆生すべての安樂・幸福のあらゆる諸法そのすべては、最上の般若波羅蜜から生起した。」と説かれています。

〔以上が、〕『正法如意宝珠・解脱の宝の莊嚴』より、「智恵の完成（般若波羅蜜）」の第十七章です。

究竟 :【くきょう】最上であること。到達した究極の境地。

当座 :【とうざ】。

正覚 :【しょうがく】正しい仏の悟り。

正等覚 :【しょうとうがく】仏の悟りのことで、このうえなく正しく平等円満の智慧の悟りの意。

現等覚 :【げんとうがく】→等覚【とうがく】。仏をいう。修行が満ちて智慧・功德が仏と等しくなった最高の位。

仏子 :【ぶっし】仏の弟子。

→智恵の完成により、①究極的には悟りが得られ、②現世においては樂や善がもたらされる、ということでしょうか、

『2018年3月6日～7日 ドルズィンリンポチェのご法話より抜粋』

「空」を理解する必要がありますが、「本当にそうだろうか」と疑うのではなく、心から「その通りだ」「本当だ」と決定することが必要です。空性を本当に信じるためには、資糧を積んで罪を浄めることが必要です。それによって、「空性という智慧」を得られます。罪を浄めることによって最後に「我というものが無い」と解ります。

「父母やすべての生き物たちが苦しんでいる。彼らが苦しみから離れられればいいのに。幸せ

になればいいのに」という慈悲の想いをもって、菩提心を起こします。自分と他の生き物、自他を平等に考え、慈悲の想いを強くすることによって、智慧も強く大きくなります。

「他」、「他のもの」は、現れているだけで実際は「空」です。それは、現れているだけで本当は真実としては成立していません。本当は「他」がないのに、なぜそう思うのかというと、心がそう思い込んでいるからです。分析すると、心も本当はありません。「他も真実として無い、自分も真実として無い」とわかります。

「空」をどうやってわかるのでしょうか。本当に空なのでしょう。空はあるのでしょうか。「無我」と言っても、「私」はあると思っています。本当に空性を理解しているのは仏です。仏は、私たちと同じように人間に生まれ、資糧を積み、罪を浄めて仏になった方です。仏になるということは、空性を理解して、「無我」を理解されたということです。

輪廻している私たちは、空性がわからず「我が有る」とと思っています。仏は我々に「無我」をわからせるために、法を示されました。「空性」を、仏は理解しています。それを認めることは簡単には出来ないことですし、実践しなければわかりません。最初から「対象としての父や母は、本当は存在しない」と言われても、よくわかりません。そこに疑いや疑問が出ます。しかし、資糧を積んで罪を浄めることで、徐々に疑いが晴れていきます。

疑うことは仕方ありません。例えば、科学者に、「コップは空を飛ぶ」と言われても、私たちは、「何を言っているのだろう」としか思いません。そこで、「コップも飛行機と同じようにすれば飛べます」と仕組みを説明されたとします。飛行機を私たちは知っていますし、仕組みを説明されれば納得します。

同様に、「無我」と聞いても、最初は全く理解できず、「おかしいのではないか」と思うかもしれませんが、理解することは可能です。「我」は、真実としては成立しません。「それは有る」と思っているだけです。仏は、「無いものを有ると思っている」ことを理解しています。

では、「無我ならば、私は無い」と考えるのも間違いです。「私が有る」と考えるのも、「私が無い」と考えるのも間違いです。空性とは、有無を離れたものです。「有でもなく無でもない」のが空性です。ここを間違えると、「私が無いので、来生も前生も無い」と誤ってしまいます。

「無我」と言いう時の「無い」は、「真実として成立していない」ことを意味します。これがわかることが智慧です。「無い」と考えることもまた無明です。智慧とは、有無の辺、「有る」「無い」という辺から離れ、「無いでもなく、有るでもない」とわかることです。